

# 「火焰描画法」から先史時代の火の世界へ近づく

佐藤 忠 司 (新潟青陵大学大学院)

キーワード：原初的心性 火焰描画法 臨床心理査定アトラス

## Approaching to a Fire World of Pre-historical Stage based on Fire Drawing Data

Chuji SATOH (Graduate School of Niigata Seiryō University)

Key words : archaic personality, fire drawing test, clinical atlas of psychological assessment

### I. 火とヒトの交流のステージ

火とヒトの交流の史実に分け入ってみて約40年が経過した。臨床心理的査定法としての刊行も一段落した(佐藤 2004)。火に関するアルカイック心性について、(図1)のように整理もおこなってみた(佐藤 1978 2004)。

われわれが現在手に入れることができる火と人の交流などに関する文献には、

- a. 文章化された文献より。リグ・ヴェーダ(辻直四郎 1970)、殷墟出土の象形文字(白川静 1990)、考古学的な発掘・発見(洞窟画)資料など(ルロワ＝グーラン 1982；パタイユ

1955：アッコー&ローゼンフェルト 1967)。大半の文献資料はこのタイプである。これら資料には後世の考古学的作業が必然的に関与している。

- b. 伝承された神話・民俗などの採集作業の結果、集められたもの。フレイザー(1929)、石上(1967)、記紀、ローハイム(1950)、柳田(1944)など。

- c. 実験考古学的手法による再現確認(岩城 1977)などがある。

また、これら文献資料とは若干手法は異なるが、

- d. 火に関する描画法を含む、現在の人間を対象として実施した、『臨床心理査定アトラス』(佐藤

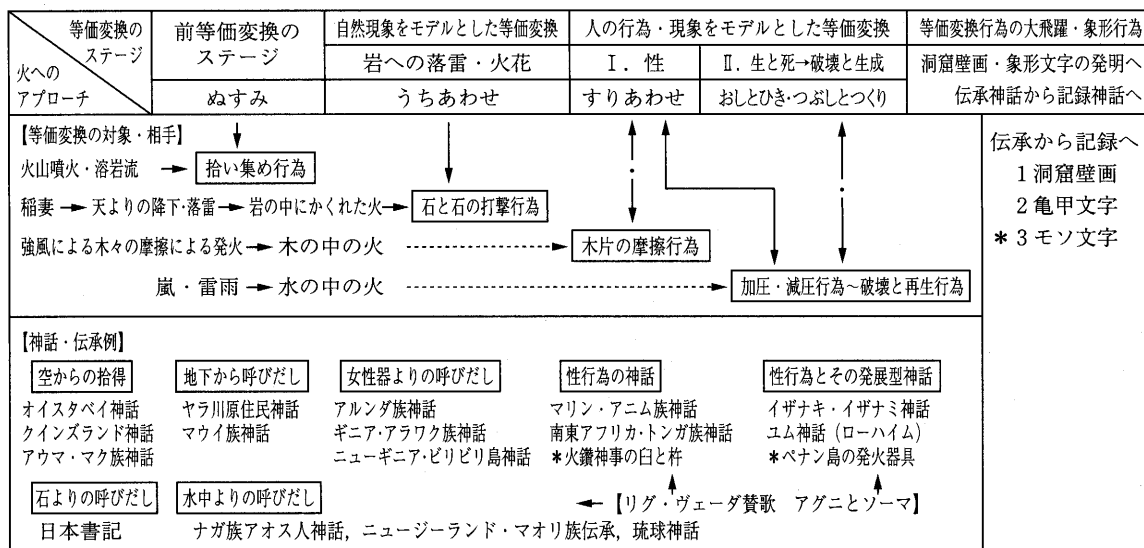


図-1 火の呼びだし獲得行為の変遷と等価変換

## 6 「火焰描画法」から先史時代の火の世界へ近づく

2004) 情報の利用の4タイプがある。

火の世界へのアプローチは、この4種の情報の円環的検討から進められる。

司法分野では「自由心証」と名づけられた論証手法を持っている。これは裁判過程について、事実証拠に基づいて被疑者の行為の是非を一步一步推考し、最後にその推考で埋まらないところを、裁判官の心証等から判断することを指している(佐藤 1975)。

1万年・10万年以前の人々の心に近づく手法として、各種史料を検討し推考を積み重ね、その後に「心理学専攻者としての自由心証」を働かせる手続きこそ、われわれがこの分野に分け入際の正攻法そのものであると考えている。

### II. われわれが原初人と共有できる火体験は何か

アウストラロピテクスやホモ・ハビリス達と、現代人が共有している火に関する体験として、まず何を取り上げればよいであろうか。すぐ思い浮かぶことは、日食、月食、火山の噴火による溶岩流や噴石による森林火災、大風による幹の擦れあいと落雷による立木の発火であろう。筆者はこれに加えて空と雲の変化、流れ星と星座、そして稲妻やオーロラ体験をあげてみたい(野尻 1955; 斉藤文一 1995)。これらの体験は、現代にあっても日常的に体験できること、情報として入手できること、古い昔のことではない身近に経験できることと、まづ最初に確認することが肝心である。

これらの自然現象から、多くの神話や伝承が生まれた(佐藤 2004)。原初人たちは次々と難関をこじあげ生活革新を成し遂げた。食習慣に加熱加工を加えた。落雷・嵐の際の木々の摩擦より発生した森林火災が収まった焼け跡から漂ってくる匂いに誘われ、おそろおそろ近づき、動植物のあらたな味を経験した。次に「暖」がもたらされ、「光明・闇の克服」も手に入れた。夜の時間があらたに生活の中に展開した。狼ら肉食獣から身を守る「安全」手法もこれに付随した。彼らにとっては、火を守ること、利用することが重要なバンドの約束事として受け継がれた。その一群の心のよりどころとしての原始宗教の萌芽が静かに始まった。

### III. 研究目的とデータベースからの打ち出し

本論はこれらの論考を受け、「臨床心理査定アトラス」に納められている火焰描画法の知見から、火と人間の交流を推論する。検討の第一段階は基礎的な情報の提示、第二段階はそれから古代心性にいかになづくかの試みを示す。

前著「臨床心理査定アトラス」ではデータベースとして、3411例型を使用した。その後データ数が増して、現在、3551例型が運用されている。この新型の各心性系別例数は(表1)に示した。本稿ではこのデータベースを使用する。3411例の旧型と3551型で打ち出された今回のCHD値(佐藤 2004 p30)では、わずかに数値は変わったが、TOP5への影響は最小限であった。なお28の心性系をサブクラスターA,B,C,D4群に分割したが、これはクラスター分析の結果として、すでに前著に示されているツリー構造の形から決められた(佐藤 2007)。

火焰描画法の実施手順とスコアリングは「臨床心

表1 3551型 データベースの例数

サブクラスター	心性系	例数
A	01# 健常心性系	144
	02# 心因受傷系	216
	03# 周縁障害系	217
	04# 自我漏洩系	60
	05# 嗜癖依存系	115
B	06# 不安強迫系	167
	07# 心身症状系	158
	08# 軽鬱状態系	196
	09# 解離症状系	158
	10# 摂食障害系	62
	11# 社会退避系	164
C	12 健常年少系	101
	13 鬱的症候系	176
	14 躁的症候系	331
	15 反社会Ⅰ系	122
	16 反社会Ⅱ系	37
	17 性的障害系	86
D	18 自殺企図系	202
	19 統合失調Ⅰ系	225
	20 妄想思考系	216
	21 統合失調Ⅱ系	235
	22 統合失調Ⅲ系	349
	23 統合失調Ⅳ系	230
	24 統合失調Ⅴ系	139
	25 酒精障害系	143
	26 高齢障害系	126
	27 器質障害系	149
	28 知的障害系	237

理査定アトラス」に掲載されている方法に依った。用意された用紙は（19×27cm）、513平方センチメートル。縦長位置で使用する事とした。データベースからMAPの打ち出し手続きは、検索条件以外、まったく前著と同一である。

#### IV. 第一段階、基礎的な情報

まず代表的な描かれた“火”についてのMAP情報を記載する。以下の説明と共に「臨床心理査定アトラス」上の描画例も参照されたい。

（表2）は大きさが、縦×横で263平方センチメートル以上（S78）、加えて外縁輪郭のみで描かれた（T1）火であることが条件で検索された結果である。検索数が60、検索比率は1.7%、TOP5は上位から10摂食障害心性系、07心身症状心性系、以下、02心因受傷心性系、01健常成人心性系、19統合失調心性Ⅰ系とピックアップされた。この条件で検索される事例の心理面接適用値（PLS）は8.0である。

用紙いっぱい描かれた火であっても、健常さの優位なサインとは限らない。意外にも10摂食障害心性系に高い値が得られた。大きな火であるが、外縁輪郭のみに近い描画線量であることが、このような人格像のゆがみを暗示する。07心身症状心性系、02心因受傷心性系の心的不調・心気性訴えが前面に現れていることも、10摂食障害心性系がTOP1であることを裏打ちしている。大きさと描画線密度のバランスが崩れているときは、心的内界に問題が潜んでいることを示している。一見、情感表明は問題なく

見受けられたとしても、情感には充実感に乏しく、空疎な感情活動が推察される。

（表3）のMAPの検索条件は、小さな火（S1）（20平方センチメートル以下）、及びほとんど外縁輪郭のみ（T1）で描かれていることである。20～24統合失調心性系と13鬱的・心的心性系、続いて27器質障害心性系が上位を占める。常識的に知られていることかもしれないが、各心性間の数的順位を確認できたことは大きい。逆に11社会退避心性系や12健常年少心性系の数値が低いこと、すなわちこれら心性系の低いことも知ることができた。

表 3

SORT CUE : ↓		MAP : F2247	
S=1 T=1			
FREQ : 61 (1.7%)			
TOP5 : 23=21=22=13=26		PLS : -6.1	
01 健常成人系	0.0	15 反社会Ⅰ系	0.3
02 心因受傷系	0.2	16 反社会Ⅱ系	1.1
03 周縁障害系	0.2	17 性的障害系	0.0
04 自我漏洩系	0.0	18 自殺企図系	5.0
05 嗜癖依存系	0.0	19 統合失調Ⅰ	0.0
06 不安強迫系	0.2	20 妄想思考系	4.8
07 心身症状系	0.2	21 統合失調Ⅱ	11.4
08 軽鬱状態系	0.8	22 統合失調Ⅲ	9.5
09 解離症状系	0.2	23 統合失調Ⅳ	11.5
10 摂食障害系	0.6	24 統合失調Ⅴ	4.7
11 社会退避系	1.0	25 酒精障害系	0.3
12 健常年少系	0.0	26 高齢障害系	8.2
13 鬱的・心的系	8.5	27 器質障害系	2.5
14 躁の症状系	0.5	28 知的障害系	4.4

（表4）から（表9）までの6枚のMAPは、火の大きさ（S）と内外の輪郭強調（L）の有無を検索条件とした。その分類基準は、（佐藤 2004 p57）に依った。

（表4）は大きな火（表2の条件と同一）と輪郭が描かれない場合のMAPである。大きな火であることから、01健常成人心性系がトップに位置することは予想したが、2位以下にいずれの心性系がランクされるか興味があった。結果は14躁の症状心性系が次位、以下、06不安強迫心性系、02心因受傷心性系と続いた。前著にも記したが、次位以下に並ぶ心性系にも注目したい。隠し味的な心の働きを担当すると考えられる。PLSは意外に低い。内外の輪郭なし、その意味の確定は他の情報に任されている。

表 2

SORT CUE : ↓		MAP : F2274	
S78 T1			
FREQ : 60 (1.7%)			
TOP5 : 10=07=02=01=19		PLS : 8.0	
01 健常成人系	11.6	15 反社会Ⅰ系	2.2
02 心因受傷系	25.6	16 反社会Ⅱ系	0.0
03 周縁障害系	7.9	17 性的障害系	0.8
04 自我漏洩系	4.5	18 自殺企図系	5.2
05 嗜癖依存系	2.3	19 統合失調Ⅰ	10.6
06 不安強迫系	10.0	20 妄想思考系	7.9
07 心身症状系	27.6	21 統合失調Ⅱ	1.1
08 軽鬱状態系	8.6	22 統合失調Ⅲ	7.0
09 解離症状系	6.8	23 統合失調Ⅳ	0.3
10 摂食障害系	40.5	24 統合失調Ⅴ	1.9
11 社会退避系	10.3	25 酒精障害系	0.0
12 健常年少系	2.6	26 高齢障害系	0.0
13 鬱的・心的系	1.5	27 器質障害系	0.4
14 躁の症状系	1.8	28 知的障害系	0.0

表 4

SORT CUE : ↓		MAP : F2265	
S78 L0			
FREQ : 388 (10.9%)			
TOP 5 : 01=14=06=02=03		PLS : 0.5	
01 健常成人系	54.5	15 反社会Ⅰ系	0.6
02 心因受傷系	11.4	16 反社会Ⅱ系	-0.2
03 周縁障害系	4.9	17 性的障害系	4.1
04 自我漏洩系	0.0	18 自殺企図系	1.9
05 嗜癖依存系	-1.7	19 統合失調Ⅰ	0.5
06 不安強迫系	32.1	20 妄想思考系	0.5
07 心身症状系	2.5	21 統合失調Ⅱ	3.5
08 軽鬱状態系	0.0	22 統合失調Ⅲ	0.0
09 解離症状系	0.1	23 統合失調Ⅳ	0.0
10 摂食障害系	0.0	24 統合失調Ⅴ	-0.7
11 社会退避系	0.2	25 酒精障害系	-1.8
12 健常年少系	0.0	26 高齢障害系	-5.2
13 鬱的症状系	1.6	27 器質障害系	-1.2
14 躁的症状系	33.5	28 知的障害系	0.0

(表5)は、大きな火であること、外縁強調があることを検索条件としたMAPである。結果は、09摂食障害が図抜けた1位であった。なぜか簡単に説明ができない。外縁を区切ることが自我に対する侵入を防ぐ意味を持っていると推測してきたが、摂食障害の心性にそれが明らかに認められると決めるには、十分な事例検討が必要であろう。

表 5

SORT CUE : ↓		MAP : F2267	
S78 L1			
FREQ : 171 (4.8%)			
TOP 5 : 10=02=07=19=03		PLS : 3.9	
01 健常成人系	10.9	15 反社会Ⅰ系	2.1
02 心因受傷系	41.2	16 反社会Ⅱ系	0.0
03 周縁障害系	22.9	17 性的障害系	0.9
04 自我漏洩系	6.0	18 自殺企図系	12.9
05 嗜癖依存系	2.5	19 統合失調Ⅰ	26.1
06 不安強迫系	7.5	20 妄想思考系	1.0
07 心身症状系	28.5	21 統合失調Ⅱ	8.6
08 軽鬱状態系	13.9	22 統合失調Ⅲ	4.3
09 解離症状系	3.4	23 統合失調Ⅳ	-0.2
10 摂食障害系	104.5	24 統合失調Ⅴ	0.4
11 社会退避系	7.8	25 酒精障害系	-0.1
12 健常年少系	1.6	26 高齢障害系	-0.4
13 鬱的症状系	1.1	27 器質障害系	0.0
14 躁的症状系	9.7	28 知的障害系	0.0

(表6)は、(表5)の条件を、輪郭強調について、中心と外縁の二重書きに変えた組み合わせである。まず目を引くことはPLSの高さである。今回載せた10枚の表の中で飛びぬけている。また、01健常成人心性系から04自我漏洩心性系まですべてTOP5に並ぶ

表 6

SORT CUE : ↓		MAP : F2269	
S78 L3			
FREQ : 112 (3.2%)			
TOP 5 : 01=03=04=11=02		PLS : 135.1	
01 健常成人系	153.0	15 反社会Ⅰ系	-0.1
02 心因受傷系	56.9	16 反社会Ⅱ系	0.0
03 周縁障害系	65.0	17 性的障害系	0.1
04 自我漏洩系	59.6	18 自殺企図系	0.8
05 嗜癖依存系	0.7	19 統合失調Ⅰ	16.1
06 不安強迫系	12.7	20 妄想思考系	3.7
07 心身症状系	13.8	21 統合失調Ⅱ	3.1
08 軽鬱状態系	6.8	22 統合失調Ⅲ	14.1
09 解離症状系	13.8	23 統合失調Ⅳ	3.2
10 摂食障害系	5.7	24 統合失調Ⅴ	0.0
11 社会退避系	57.1	25 酒精障害系	-0.1
12 健常年少系	0.8	26 高齢障害系	0.0
13 鬱的症状系	0.2	27 器質障害系	0.0
14 躁的症状系	0.2	28 知的障害系	0.0

のは珍しい。確かにクラスター分析で処理された配列であるが、実際の事例や検索群では28心性系全体に高低の数値が分布する。この分布の有様が数値として得られることがこのアトラスの最大の利点である。

外縁強調のみの検索条件であった前表に比較して、この二重強調の場合、なぜPLSが高いのか注目される。また11社会退避心性系がTOP5で第4順位にあることは、不登校事例各例の持っている個別性、たとえば健常心性機能が優位であって、学校集団への参加を拒んだ場合(生徒の側から積極的に学校を捨てる)もあることの証左としても考えられる。

(表7)は一転して、小さな火(46平方センチメートル以下)であって、強調の認められない場合を

表 7

SORT CUE : ↓		MAP : F2270	
S12 L0			
FREQ : 579 (16.3%)			
TOP 5 : 28=26=25=23=13		PLS : -66.2	
01 健常成人系	0.0	15 反社会Ⅰ系	16.0
02 心因受傷系	5.3	16 反社会Ⅱ系	22.9
03 周縁障害系	13.8	17 性的障害系	0.4
04 自我漏洩系	0.0	18 自殺企図系	21.5
05 嗜癖依存系	60.6	19 統合失調Ⅰ	5.6
06 不安強迫系	6.9	20 妄想思考系	101.2
07 心身症状系	14.4	21 統合失調Ⅱ	38.0
08 軽鬱状態系	0.7	22 統合失調Ⅲ	119.4
09 解離症状系	26.9	23 統合失調Ⅳ	122.3
10 摂食障害系	0.0	24 統合失調Ⅴ	112.2
11 社会退避系	0.1	25 酒精障害系	405.6
12 健常年少系	8.6	26 高齢障害系	506.4
13 鬱的症状系	121.5	27 器質障害系	119.6
14 躁的症状系	112.5	28 知的障害系	610.6

検索条件とした。MAP表の右下に高い値が集まる。28知的障害心性系・26高齢障害心性系などが優位のTOP5である。PLSは非常に低い。MAPの左上には低い値が集まる。この中で05嗜癡依存心性系がやや高い数値を示す。25酒精障害心性系への推移を予測させるデータかもしれない。

(表8)は、(表7)と同じ大きさの小さな火であることと、外縁強調を条件として検索したMAPである。統合失調各心性系がTOP5に並んだ。28知的障害心性系はじめ、25酒精障害心性系・26高齢障害心性系と、27器質障害心性系の値が大きく分かれたことも注目したい。器質障害心性系群の編成は、壮年期年齢以下のサンプルが中心である。24統合失調V群と19統合失調I群の値が共に低く中央各群が高い、かまぼこ型数値分布を示すことと関係して、この傾向は障害と年齢の複合的な意味を示していると推論できる。

表8

SORT CUE: ↓		MAP: F2271	
S12 L1			
FREQ: 342 (9.6%)			
TOP5: 22=27=21=23=18		PLS: -3.2	
01 健常成人系	0.0	15 反社会Ⅰ系	0.0
02 心因受傷系	0.8	16 反社会Ⅱ系	11.5
03 周縁障害系	1.4	17 性的障害系	3.7
04 自我漏洩系	0.1	18 自殺企図系	13.9
05 嗜癡依存系	5.4	19 統合失調Ⅰ	0.3
06 不安強迫系	0.8	20 妄想思考系	13.6
07 心身症状系	2.1	21 統合失調Ⅱ	43.7
08 軽鬱状態系	0.5	22 統合失調Ⅲ	61.0
09 解離症状系	4.9	23 統合失調Ⅳ	36.0
10 摂食障害系	0.0	24 統合失調Ⅴ	11.2
11 社会退避系	0.9	25 酒精障害系	0.0
12 健常年少系	0.3	26 高齢障害系	3.8
13 鬱的症状系	6.3	27 器質障害系	47.6
14 躁的症状系	1.5	28 知的障害系	4.3

(表9)は、小さな火と二重の強調が検索条件である。04自我漏洩心性系の値が目立っている。(表6)にもこの傾向が認められることと併せて考えると、二重強調は04自我漏洩心性系の意味を考えると重要な指標となる。なぜ自我内界をプロテクトする意識下の仕組みが、他の心性系に比較して高いのかである。また18自殺企図心性系が、TOP1であることにも注目して考察を組み立ててみると、情感の萎縮と、なおもプロテクトが続く自我防衛が働いている現状が提示されていると読むことができる。

以上、火焰描画の際の焰の大きさ、線の密度、輪

表9

SORT CUE: ↓		MAP: F2273	
S12 L3			
FREQ: 97 (2.7%)			
TOP5: 18=04=21=08=11		PLS: 0.2	
01 健常成人系	0.4	15 反社会Ⅰ系	0.0
02 心因受傷系	16.8	16 反社会Ⅱ系	3.7
03 周縁障害系	12.3	17 性的障害系	3.6
04 自我漏洩系	44.0	18 自殺企図系	52.8
05 嗜癡依存系	2.4	19 統合失調Ⅰ	20.6
06 不安強迫系	1.2	20 妄想思考系	0.1
07 心身症状系	9.2	21 統合失調Ⅱ	36.6
08 軽鬱状態系	31.2	22 統合失調Ⅲ	17.8
09 解離症状系	3.2	23 統合失調Ⅳ	15.7
10 摂食障害系	5.7	24 統合失調Ⅴ	0.5
11 社会退避系	18.1	25 酒精障害系	0.0
12 健常年少系	0.8	26 高齢障害系	0.0
13 鬱的症状系	0.0	27 器質障害系	1.6
14 躁的症状系	0.7	28 知的障害系	0.0

郭強調の有無の条件を種々組み合わせて、8枚のMAPを提示した。これら条件差により生ずる、各心性系の数値変化は、ピオトロウスキー (Piotrowski 1957) の提唱した、ロールシャッハ・テストにおけるPIC (各指標の相互依存性 Principle of Interdependence of Components) の発想の、火焰描画結果への適用の一部である。

## V. 第二段階、火焰描画法のデータから先史時代の洞窟内描画行為へ近づく

火焰描画の基礎データから火と人の交流の話題にたどり着くためには、架けるべき推論を数多く必要とするが、ここではテーマをひとつ選ぶことにする。「明と暗」である。

まず思い浮かぶのは、ラスコー洞窟やアルタミラ洞窟の闇の中に描かれた動物たちの絵である。これらの洞窟画は、昼でも光のまったく届かない暗闇の世界の壁に描かれている。しかも一部の絵は、一人が腹ばいになって描いたとしか考えられない場所にある。この洞窟内の状況が数万年前も同じであったか、もっと浅い状態の地層でなかったか。当時、岩にクラックがあって光が差し込んでいたのではないかなど、確かに異論はありそうである。たとえばサハラの岩壁画は現在、砂漠の中にある。しかし有史以前そこは密林であった。気候の変動で状況は一変している (木村 1971 1983)。それと同様な大きな地殻変動が、洞窟内壁画の描かれた地方に数万年間起きていなかったのか。自然科学的な推論のほか

に考古学的な発掘物がそれを否定しているようだ。

ラ・ムート洞窟やラスコー洞窟内からは、石灰岩や砂岩製の燭台が発見されている（アッコウ & ローゼンフェルト 1967）。この事実から当時、そこは明かりが必要であったと考えてみたい。光源は松明様または油様のものと推論すると、当然、煤が発生していた、煙も生じていたと考えるのが自然と思われる。絵はこれらの問題を克服しながら描かれた。煤の少ない明かりとは、現代の常識からは、それは小さな燃え上がり感の抑えられた火と推論できる。

この明かりの光源について、アルレ（Harle E.）は洞窟内で継続して絵を描くには人工照明が必要と主張した。すなわち先史人の使用したであろう松明は相当量の煤を出していたはずである。しかしアルタミラ洞窟の天井や壁面には、その痕跡がまったく無い。したがって近代的な照明の下でそれは描かれたと論じた。一方、一部の装飾洞窟では、時々年代の明らかに同定される（旧石器時代と）堆積物の下から、焚火の跡や炭片など、照明源の遺物と推察されるものが出土する（アッコウ & ローゼンフェルト 1967）。

なぜ洞窟の天井や壁に煤が付着していないのか、あるいは数万年の時の経過の中で、なぜ洞窟画は残り、煤は剥落してしまうのか。洞窟画の年代同定に欠かせない問題であるが、謎は残されたままであるという。

ネアンデルタールやクロマニヨンたちは、なぜこのような暗い描きにくい岩壁を選んで、ヒトや動物たちを描いたのであろうか。有力な推論のひとつに、「呪術の世界・祈りの場」説がある。そこでは「明かり」が役受け持たなくてはすべてが始まらない。松明の明かりで洞窟を照らす、そして洞窟の岩肌に動物やヒトを描く、祈る、呪術がおこなわれる。その空間に彼らの心性はいかに共鳴していたのであろうか。われわれにとって、まったく手がかりのない推論の世界のようである。

しかし、手元には「火焰描画法」からの情報があまる。彼らの使った洞窟内の明かりは、移動できる光源であって、しかも発熱の少ない小さな火であったと考えられる。それは祈りのための火である一方で、描き行為のすべてを支配していた。小さな火であること、および祈り心性（憑依的心性・妄想様心性）をひきおこすためには、いかなる条件が満たされば出力するのか、データベースにトライしてみた。

（表10）が得られた。火の大きさは21～46平方セ

表10

SORT CUE: ↓		MAP: F2277	
S2 T12			
FREQ: 170 (4.8%)		PLS: -2.0	
TOP 5: 22=24=23=20=04			
01 健常成人系	0.0	15 反社会Ⅰ系	1.8
02 心因受傷系	1.4	16 反社会Ⅱ系	0.0
03 周縁障害系	0.2	17 性的障害系	1.9
04 自我漏洩系	12.3	18 自殺企図系	6.7
05 嗜癖依存系	4.0	19 統合失調Ⅰ	7.1
06 不安強迫系	0.0	20 妄想思考系	13.5
07 心身症状系	10.8	21 統合失調Ⅱ	4.6
08 軽鬱状態系	1.9	22 統合失調Ⅲ	26.6
09 解離症状系	1.8	23 統合失調Ⅳ	22.1
10 摂食障害系	0.0	24 統合失調Ⅴ	23.0
11 社会退避系	7.2	25 酒精障害系	6.8
12 健常年少系	0.0	26 高齢障害系	11.9
13 鬱的症状系	11.8	27 器質障害系	0.3
14 躁的症状系	5.2	28 知的障害系	11.1

ンチメートルであること、描画線の密度は外縁以外数本の線しか描かれなとの2条件で求められた。20～24統合失調Ⅲ～Ⅴ心性系と20妄想思考心性系および04自我漏洩心性系がTOP 5に並んだ。

検索条件は明らかに岩肌を照らす光の適度な大きさ（S2）と、ほのかな明かりの程度（T12）を示した。描画線密度の少なさは熱量の低さを示すと考えられる。情感の雰囲気は内閉的な抑制された世界（22～24統合失調心性系、13鬱的症状心性系）を示している。外界とのコミュニケーションは絶たれた空間（11社会退避心性系）が作られた。そして呪術者の世界（20妄想思考心性系、04自我漏洩心性系）がそこに展開した。

この情報の安定を確認するには、検索条件を少しスライドして、他のMAPのTOP 5などを比較すればよい。この処理の結果、検討すべきMAPとして（表3）、（表8）と（表9）が確認された。これらMAPのTOP 5には20妄想思考心性系の記載はない。しかしMAP内のCHD値を見てみると、この心性は（表3）では7位に、（表8）では6位にランクされている。両表ともTOP 5に挙げられた他の心性系は、各統合失調心性系と一致する。一方（表9）は04自我漏洩心性系が2位にランクされた。しかし20妄想思考心性系は隣接する心性系よりも、際だって低い落ち込みを示している。この二つの心性系は共通する地平として“ゆがんだ思考”を持っている。しかしクラスター・ツリー上の位置はまったく離れている。PLS各の値も差が示される。（表10）のMAPは“健常さにひそんでいるゆがんだ思考”、すなわち「健常の中の

異常」(佐藤 2004 p 236)を示しているようだ。この世界が、洞窟内における先史人の祈りの姿かもしれない。

これらの検索条件はS1・T1、S12・L1とS12・L3である。小さな火と強調、およびわずかな線密度の条件は、(表10)の条件と隣り合わせである。

## VI. おわりに

先史人たちの暗い洞窟内の描きの行為・その岩壁の前で描いているときの心理的状态は、現代からは図り知ることにはできない。しかし今回は自由心証的接近法として、火焰描画法の情報を利用し近づいてみた。

火に関する文献・史料は、スペースの関係でほとんど割愛した。興味をもたれる各位は(佐藤 2004)の文献も合わせてご覧いただきたい。

## 文 献

- 石上堅(1967): 火の伝説 宝文館出版  
 岩城正夫(1977): 原始時代の火 新生出版  
 Bataille, G. (1955): La Peinture Préhistorique Lascaux (出口 裕弘訳 ラスコの壁画 二見書房)  
 Frazer, J.G. (1929): Myths of the Origin of Fire (青江舜二郎 訳 火の起源の神話 角川書店)  
 木村重信(1971): 美術の始原 新潮社  
 木村重信(1983): サハラの岩面画ータッシリ、ナジェールの彩画と刻画 日本テレビ  
 Leroi-Gourhan, A. (1982): Les Racines du Monde (蔵持不三也訳 世界の起源 言叢社)  
 野尻抱影(1955): 星の神話・伝説集成 恒星社  
 Piotrowski, Z. (1957): Perceptanalysis (上芝功博訳 知覚分析 新曜社)  
 R  heim, G. (1950): Psychoanalysis and Anthropology (小田 晋他訳 精神分析と人類学 上下 思索社)  
 斉藤文一(1995): 空の色と光の図鑑 草思社  
 佐藤忠司(1975): 心理検査の臨床的理解 (岡堂編 心理検査学 45~56 垣内出版)  
 佐藤忠司(1978): 火焰描画法 ロールシャッハ研究XX 99~116 金子書房  
 佐藤忠司(2004): 火焰描画法の採用サイン、火とヒトの交流史(臨床心理査定アトラス 51~62 265~273 培風館)

- 佐藤忠司(2007): 臨床心理査定アトラスへの招待 印刷 中 培風館  
 白川静(1990): 火の民俗学(文字遊心 140~165 平凡社)  
 辻直四郎(1970): リグ・ヴェーダ讃歌 岩波書店  
 柳田国男(1944): 火の昔 実業之日本社  
 Ucko, P.J. & Rosenfeld, A. (1967): Palaeolithic Cave Art (岡本重温訳 旧石器時代の洞窟美術 平凡社)